見える喜びを最新の情報で支える Intelligent magazine

Menicon

The Menicon

78

for Doctors

produced by Menicon

www.menicon.co.jp

Contents

01 メニコンが考える「見える喜び」
02 今できること一子どもの瞳応援部
03 special interview
05 伊丹中央眼科様の院内コミュニケーション
07 ;History

special interview

平岡孝浩先生

筑波大学医学医療系眼科　准教授

Menicon Academy

special interview

The Menicon

筑波大学医学医療系 眼科 准教授 平岡孝浩 先生

Profile

筑波大学博士。専門分野は眼調節、眼[illegible]、網膜細胞手術機器、コンタクトレンズ、オルソケラトロジー。近年は近視進行[illegible]研究にも注ぐ。

[illegible]医学専門学群卒業後、筑波大[illegible]や茨城西南医療センター病[illegible]に従事。2020年より筑波[illegible]眼科 准教授。

セミナーオンデマンド

平岡先生のご講演含め、アカデミーサイト上でセミナー動画をご視聴いただけます。視聴にはパスワードが必要です。
パスワードはこちら▶[Ub8QYb]

子どもたちの輝く笑顔が、研究・診療に挑む原動力。

筑波大学医学医療系眼科に所属している私は、医師であり大学教員であり研究者です。臨床・教育・研究の3本柱で眼科診療や後進育成、よりよい治療方法の確立などに取り組んでいます。現在、最も多くの時間を費やしているのが、近視進行抑制に関する研究です。特に関心を寄せているのが「オルソケラトロジー」。特殊な形状のコンタクトレンズを就寝時に装用し、角膜のごく表面を平坦化することで近視を矯正し、さらに近視の進行を抑える治療法です。

大学でこの研究に着手したのは約20年前。「オルソケラトロジーが角膜形状や光学特性、視機能に及ぼす影響」を解明しようと、学童の眼軸長を定期的に測定し、データ解析に励みました。すると、オルソケラトロジーの眼軸伸長抑制効果が有意差をもって確認できました。そこから近視進行抑制の大きな可能性を感じて、研究に一層熱中するようになりました。

ライフスタイルの変化によって近視患者数が増え続け、2050年には世界の人口の約半数が近視になると推定されています。失明に至る眼疾患の発症リスクが強度近視患者では高まることも明らかになってきており、「近視はメガネやコンタクトレンズで矯正しておしまい」という時代は終わりを迎えています。人生100年時代、近視が最も進行する学童の頃から適切な治療を受け、長い人生の中でできるだけ近視を軽く抑えることが、一人ひとりのより豊かな日々につながるはずです。そうした思いから、私は近視進行抑制の研究に力を注いでいます。

ここ10年ほどでオルソケラトロジーの臨床研究が世界で盛んに行われ、近視進行抑制効果のエビデンスが豊富になってきました。7～10年の継続症例もあり、有効性と安全性が各国の眼科学会で認められています。また、6～8歳という早期から開始した方が、急激な近視進行を抑制する効果がより強まるとの報告もあります。

日本では、オルソケラトロジーガイドラインが改定された2017年以降、小児への処方が徐々に増えています。日本は、近視進行抑制治療に関する環境整備はまだまだこれから。特に、子どもの近視への対応が遅れていることが課題です。諸外国のように、オルソケラトロジー以外にも多焦点SCLやアトロピン点眼などの多様な治療から最適なものを選べると、多くの子どもたちが近視の悩みから解放されるのではと考えています。

実際、オルソケラトロジーを受ける子どもたちの満足度は高く、「よく見えるようになった！」「メガネがいらないから思いきり運動できる！」といった喜びの声を聞かせてくれます。そのキラキラした笑顔が、研究・診療の励みになっています。

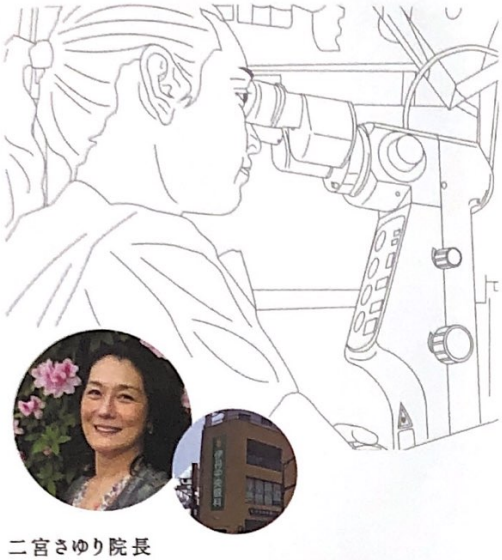
今後、さらに注力したいのが、AIによる高精度の近視進行予測を確立すること。個々の症例の抑制効果を正しく把握し、その人に合った適切な治療計画が立てられるしくみを構築したいと考えています。2019年にメニコンの近視進行抑制用オルソケラトロジーレンズが世界で初めてCEマークを取得しました。そうしたよりよいレンズが開発され、使用方法として認められることも、研究の推進力になります。近視進行抑制治療が一般的になり、年齢を問わず多くの患者さんの、見える喜びに貢献できる、そんな未来が早く訪れることを願っています。

※CEマーク：EU加盟国で販売される指定の製品が、安全基準、使用者・消費者の健康及び安全を保護するための条件を満たすことを証明するもの。
※近視進行抑制用オルソケラトロジーレンズは日本国内では未認可となっております。

Communication

伊丹中央眼科様における院内コミュニケーション

温かい魅力に溢れる伊丹中央眼科様――
その秘訣を二宮院長とクリニックを支えるスタッフの皆様にお伺いしました。



二宮さゆり院長

専門分野は近視抑制治療、弱視治療、角膜疾患、特殊コンタクトレンズ処方など。大阪大学医学部卒業後、同大学大学院感覚機能形成学を卒業。ニュージャージー医科歯科大学に留学。2005年に伊丹中央眼科を開設。

「自分の家族だったら、どうする?」という気持ちで患者様に接しています。

わざわざ当院を選んで来院してくださる患者様には、"自分の家族だったらどうする?"という気持ちを持って診療しています。クリニックでは子どもの近視治療から日帰り網膜硝子体手術まで、いろいろな治療を行っていますので、幅広い年代の患者様がいらっしゃいます。子ども達には将来の眼疾患予防の為に近視治療を積極的に行い、若い世代には最適なコンタクトレンズの処方や使い方への啓発、中高年世代は眼の成人病(緑内障や黄斑変性症など)、高齢の患者様には白内障治療などです。どの治療においても常に最先端の知識と技術を提供できるよう、医師やスタッフは勉強し続けるべきであり、医療というのはそういう仕事と考え努力しています。伊丹市は都会でありながら地域のコミュニティーが残っているという、ちょっとユニークな地域です。家族で来院されている患者様も多いです。うちは開業以来15年スタッフの入れ替わりが殆ど無いため、スタッフ達は患者様の顔と名前は勿論のこと、家族関係などのバックグラウンドにも精通していて、それが治療にも大いに役立っています。

伊丹中央眼科様の魅力をスタッフの皆様へお聞きしました!

- 二宮先生のお人柄
- 個々の得意分野を生かしたチームワーク
- ポジションに関係なく様々なことを学べる
- 相手を受け入れる、のびのびとした雰囲気
- 近視進行抑制治療含め色々な治療を患者様へ提案できる
- 患者様、お一人おひとりのベストを目指す!

伊丹中央眼科様は、いつも多くの方が来院されており、患者様の満足度が非常に高い様子を訪問時にお見受けします!また、お取り扱い頂いているオルソケラトロジーの処方について、私へも丁寧にご教授くださり、非常に勉強になっております。これからも、オールメニコンで精一杯サポートさせていただきます。いつも本当にありがとうございます!

営業担当　竹内　遼

若年層の患者様との心温まるエピソード――

病的近視の女児がいて、彼女に出来る事を常にリサーチしています。彼女のおばあちゃんはうちのクリニックで白内障手術をしており、それなりの強度近視眼底と知っているだけに、彼女の将来に危機感を感じるからです。小学校1年生で10Dに迫る強度近視。分厚い眼鏡の奥で目を細めないと見えないためか、いつもしかめっ面でした。とにかく眼鏡のままではいけないだろうと、多焦点SCLを処方しました。そうすると、しかめっ面だった彼女の顔が診察の度に明るくなっていきました。スタッフなどは、「Yちゃん、ニコニコするようになってびっくりした〜!」と言っていました。病的近視に効果のある治療法は判っていないとしても、彼女にとっては眼鏡から解放された喜びは大きかったようです。そして、小さいながらも一所懸命に近視が進まないよう努力するようになりました。たとえば、タブレットやスマホゲームは一切せず、おばあちゃんにクリスマスプレゼントのリクエストを聞かれたら、なるべく外で一人でも運動して遊べるように、フラフープが欲しいと言ったそうです。彼女が大人になる頃まで私が医師として働けているとは思いませんが、それでも今の彼女にしてあげられることを探したいという気持ちが、私の近視診療の原動力になっているのは確かです。